

鳥は、星に向かって飛ぶ

田中和洋 千葉県

星を見るなら冬に如かず ——。

夜、モコモコに着ぶくれした恰好で、外に出る。関東平野では、凍てつくほどの北風が吹いてる。ぼくはライトを灯した自転車をこいで、近所のコンビニエンスストアへ向かう。ホカホカの肉まん食べたさに。

途中、たんぼの間の道に通りがかり、自転車を止める。空を見上げ、いくつもの星々が煌々と輝いてるのを、懐かしい思い出とともに見つめる。

サソリに殺されてしまったオリンは、以来、サソリの現れない冬に、その姿を見せるのだとか。

今から二十年以上も昔、まだ高校三年生だったころ、ぼくは一年間だけ、地学部に入籍した。それまで帰宅部だったぼくが、なぜいきなり部活に、それも地学部に入ったのか ——。

ぼくらの高校は、町から離れた小高い山の上にあった。正直、あんまり勉強のできる学校じゃなかった。けど楽しい日々だった。学校は、勉強だけじゃないから。

卒業生の多くは、地元で就職を果たしていた。なかには学校の推薦を使って、県内の短大や専門学校に進む生徒もいたけれど、四年制の大学を目指す者はごくわずかだった。受験勉強をしなればと思いつつも、当時のぼくは、そのやり方すら分かっていなかった。なんともお気楽な生徒だった。

ある日、小学校以来の友人である S 君にそのことを相談すると、「じゃあウチの部活に来なよ。ウチの顧問の先生なら、きっと手助けしてくれるよ」

そう言ってくれたので、ぼくは早速地学部のドアをたたいた。それ以降、放課後になると、部室である地学準備室でトグロを巻き、科学雑誌や星座の本たぐいを、わけも分からないま読むようになっていった。

地学部のメンバーは、わずか三名しかいなかった。前述の S 君、唯一の女性である後輩の一年生 H、そしてぼく。部活としてはかなり小規模だったが、そのぶん、やりたいことができていた。顧問の T 先生は若く、当時まだ二十代後半だったはずだ。独特の雰囲気をもったひとで、一般の生徒たちには、近づきがたい印象だったと思う。石が大好きで、骨の髄まで地学屋だったけれど、やる気のある生徒たちになら、とことんまでつきあってくれた。時々、カール・セーガンのモノマネをして、

「金星 ——」

なんて言いながら、夕空を指差したりして。

そんな T 先生に、ぼくは今でも感謝している。ぼくだけじゃない、S 君も H も、やはり感謝しているだろう。

結局ぼくは、地学部の活動が楽しくて、受験勉強なんてほとんどまったくやらなかった。いつたいたいなにに地学部に入ったのか、本末転倒だった。

まだ、インターネットもなければ携帯電話も普及していない、牧歌的な時代だった。

今でこそ、知りたいことや調べたいことは、ネットで簡単に分かるけれど、当時はそんなもの、もちろんなかったから、自分たちで逐一調べなくちゃならなかった。分からないことや難解な用語にぶつかってT先生に訊いても、T先生は、

「辞書を引け！」

「天文年鑑を見よ！」

などと言うばかりで、すぐには教えてくれなかった。それでぼくらはひーこら行って、辞書を引いたり天文年鑑をめくったり、関係する記事の載っている雑誌やらを読み漁った。それでもなお分からなければ、改めてT先生に質問した。T先生はそのときになって、ようやくぼくらの質問に答えてくれた。ずいぶん手間のかかる時代だった。ハッキリ言って、面倒だった。だけどそのぶん、血肉になったという自負は、確かにある。

ぼくらはしばしば、「天体観測」と称して週末に学校へ泊まった。昼間のうちに、部室から屋上へと、分解した望遠鏡や双眼鏡、そして資料を運び上げ、夕方になると、夜露でレンズが濡れないようにカバーをかけた。

校舎は森に囲まれ、屋上からはぼくらの町が眺められた。町の向こうのさらに向こうの工業地帯に沈んでいく夕陽と、深い群青色に染まっていく西の空を、屋上から初めて見たとき、こんなにも美しい光景が、こんなにも身近にあったのかと、ぼくは感動すら覚えたものだった。どうしてだれもこのことを、今まで教えてくれなかったのだと、悔しくさえ思った。

「天体観測」はしかし、その実態は「観測」などという立派なものではなかった。なにしろ、普通の高校生のすることだ。実際のところは、たんにみんなで星を見ましようというだけのことだった。けれど、高校生にとって、仲間とともに一夜を学校で過ごすということが、どれほどエキサイティングなことだったか！

手始めに、頭上に浮かぶ半月を、望遠鏡で眺めてみる。揺れる大気の向こう、光と影の狭間に、大小いくつものクレーターが並んでいる。何度眺めてみても、あの星のうえにひとが立っただなんて、にわかには信じられなかった。嘗て観た映画のワンシーンを回想するように、ぼくらは望遠鏡をのぞきこんだ。

そして、レンズを通して実際に目にした惑星たちの美しさ！

この体験は、とても新鮮で衝撃的だった。そこに星が浮いてるというまぎれもない事実。テレビや写真ではない、本当に自分の目で見た確かな世界。教科書では味わえないことが、世の中にはたくさんある。

暗闇のなか、赤いセロファンを貼りつけた懐中電灯の明かりで、ぼくらは資料や星座の早見盤で星々の位置を確認した。あれは何座の一等星、そこからたどって、こちらは何座、その星の近くには、こんな星雲や星団……。

なかでも、冬の夜空は素晴らしかった。何度見ても飽きることがない。巨大なオリオン、おおいぬ、こいぬ。おうし座にふたご座。さまざまな星たちの輝きが、これでもかといわんばかりにちりばめられている。透明な空気に磨かれ、ますますその色を際立たせる。たったひとつの難点は、とても寒かったこと。

やがて月が沈み、望遠鏡や双眼鏡でひと通り星々を観察し終えると、ぼくらは決まって、ごろんと大の字に寝転がり、夜空を見上げた。

「綺麗だなあ……」

ぼくらの目の前には、途方もなく果てしない宇宙が広がっていた。それはぼくらの未だ見ぬ将来そのもだった。

ぼくらには、天文学や物理学、相対性理論や量子論といった、難しいことはもちろん分からなかった。けれど星空を見上げ、それを美しいと感じることができていた。

たぶん、ぼくらは空を飛ぶ鳥のようなものだった。数学や流体力学を知らなくても、鳥は空を飛べるのだ。そして鳥は、星に向かって羽ばたく。

やがてさすがに眠くなり、ぼくらは階下の部室へ降りて、わずかな仮眠をとった。目が覚めれば、夜明け。ぼくらは再び屋上に上がり、朝を迎えた。

東の空が徐々に明るくなり、周囲の風景がその色彩を取り戻す。昇ってくる太陽は、いつでも神々しい。寝不足でふらふらになりながらも、元日の初日の出を味わうように、ぼくらは神妙な気持ちになる。ありふれた週末のありふれた朝なのに。けれどそれは新しい一日。昨日はもうやってこないという、確かな時間の流れ。

結局ぼくは、進路未定のま高校を卒業した。仕方なかったと思う。星空ばかり見上げていたから。

数え切れない星々に見守られ、ぼくは再び自転車をこぐ。遠い遠い宇宙の彼方で、ホカホカの肉まんをおいしそうに頬張る、もうひとりの自分を思い浮かべながら。

二十億光年の孤独 ——。

ぼくらが生まれる前、詩人はそううたった。宇宙の大きさが、まだ二十億光年とされていたころのことだ。観測機器の発達や研究者の尽力のおかげで、今や宇宙はおよそ一五〇億光年もあるらしい。そしてぼくら一人ひとは、相変わらず孤独だけれど、だからこそ生きる意味があるんだと、そんなことを考える。このちっぽけな存在は、そうして時々、宇宙をつつみこむほどの想像をふくらませる。

いくつもの季節をめぐる、ぼくらは成長した。

ぼくはかろうじて大学に受かり、S君も、ぼくとは違う大学に進んだ。後輩のHは県内の短大に通い、T先生は何度かの異動を経て、今はご自身の母校の高校で教鞭をとっているらしい。

みんな離れてしまった。もう、すれ違うことすらない世界へ。

けれど、ぼくらの絆は今でも続いているとぼくは信じている。どれほど遠いところにいようと、その星たちが輝いている限り、いつまでも、ひとつの星座を描き続けているように。

(了)